

## 北海道支部

月 日 1979年2月2日

テーマ 北海道をめぐる国際関係について

講 師 自衛隊札幌地方連絡部長 荒田東雄陸将補  
防衛庁防衛研修所 福島康人教官

日本国は地理的にはいわゆる“極東”地域に属しますが、国際政治的には“極西”に位置するともいわれます。そのわが国が「極東ソ連」と3つの方向にて指呼の間で接しているのが北海道です。1941年、日本機動艦隊はエトロフ島ヒトカップ湾から発進して真珠湾へむかいました。北海道東部から千島列島に沿って北米大陸へのびる大圏コースは空間と海の回廊として世界経略の要たる地位は遙かな未来まで変ることはいずれでしょう。

ところで、諸外国で盛んにとりあげられているORの重要テーマに“国際問題”があります。本邦でもこれを論じていることはありません。現に教養部にて国際関係論なる科目を設けている大学もあり、学問の対象となっていることでもあります。加えて北海道には「北方圏構想」といって、気候風土の似た北欧や極東ソ連、カナダなどとの経済・文化交流をはかろうという活動があります。そのような次第で、今回は最も注目すべき隣国一極東ソ連を重点に選んで、頭書のテーマと講師陣にて研究会を開きました。福島氏は防衛研修所にて国防経済論を講義、荒田陸将補は長年統幕で活動された方で、いずれもその道でのトップの権威となっている方々であります。このようなテーマの研究会は他に類もなく、北海道でも初めてのものと考えられたので、学会外にもよびかけることとし札幌市内関係官公庁にも案内したところ、さまざまな反応があり、各役所の性格が反映して興味深いものがありました。非会員も含め、通常予想される数の倍以上の出席者を得て、盛会でした。

さて、ポリショイ・サーカスや赤軍合唱団、またモスクワパレー団等のファンには申しわけないが、ソ連にはその軍事力以外に他国に対してシャッポを脱がせるようなものがなく、これはソ連人自身がよく知っていて、しかるが故に常に外交のペースにそれを据えるようです。

北海道周辺におけるソ連の行動もその例外ではなく、まことに“ロシア的”といえる特徴があります。このような事情をふまえ、講師おふたりから、ソ連全体および極東ソ連、また北方諸地域の国々の経済・軍事情勢や、対応するわが国のパワーの実態について最新の情報の提供とその分析がなされ、それに対して活発な質疑が交されました。会后、出席者一同で昼食を共にしましたが、話はずきず、まことに有益なORの集いでありました。

極東ソ連について語る時、結局は彼地の軍事情勢に落ちついてしまうのですが、少々数字をあげると、陸軍40万人以上、艦隊133万トン、航空機2千機を有する大勢力です。これに対する国際的バランスパワーの一部をなす日本自衛隊の全容は、陸上15.5万人、海上16.7万トン、航空機470機で、うち北海道には陸上4個師団、1砲兵旅団、1高射旅団、1戦車旅団、3施設旅団の計約5万人、海上勢力はほぼゼロ、1航空団と1高射群が配備されております。防衛力は数だけでは決まらぬが、質的面も大したことはなく、にもかかわらずわが国が安全を保ち得ているのは、地の利に加えて何か補完的な働きをもつ種々なパワーと、恐らくは幸運に支えられてのことでしょう。研究会の討論の場で懸念されたことは数週間後にはすでに現実のものとなり、インドシナでは戦争が起き、北海道周辺のソ連軍基地にはトップクラスの有力な将軍が送りこまれ、その強化に払われている努力は端倪すべからざる将来を示しているかにみえます。太平洋全域をにらんだソ連の世界戦略の重要拠点として、北海道周辺の空域・海域がいかなる役割を占めるか、歴史が脚光を投ずる日は遠くないでしょう。

国際問題は産業・経済・文化、国民生活、防衛努力等、国のもつパワーのすべてが総合して動くもので、決して“花とシャンペン”の交歓だけですむものではありません。もてる知恵と力のすべてを結集して、物騒なこの世界で事を処してゆかねばならぬでしょう。ところが「黒船来航以前の江戸時代とさして変らぬ意識構造だ」とある知日外国人から評された昭和元祿の日本人たるもの、自ら省みてどうでしょうか。北海道では官民ともにこういった厄介な問題に触れたがらぬようですが、この状態をソ連主脳部のいう“フィンランド化”と称するのも知れませんが、しかしそのかげに18世紀以来の根深い恐露感情が垣間見えます。粘り強く、理性的に隣国との平和の計を考える輪が、今般の研究会を機会に、ひろがってゆくことを願っております。

(北海道支部 浅利英吉)